台大日本語文研究第 35 期
2018 年 6 月，頁 113-139
2018-03-30 收稿，2018-04-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201806_(35).0005

關於造語成分的縮略形日語外來語詞素
—以生產性較低的詞素為主—

林慧君*

摘要

本論文以「ビニ傘」的「ビニ」、「コスパ」的「コス」「パ」等語意、形態並不完整且無法單獨使用的縮略形日語外來語詞素為分析研究對象，進行構詞考察。

首先針對縮略形日語外來語詞素本身，從與縮略前的原詞根之間的關聯性、以及形態、結合對象等構詞層面來分析，結果確認了：縮略形日語外來語詞素大部分(9 成以上)其原詞根詞素之外來語在日語是存在的，且有一半以上是所謂的「唯一詞素」，整體而言生產性很低。其次，也探討釐清了縮略形日語外來語詞素成為日語詞素的理由。另外，也透過跟「ロケ」、「レジ」等外來語縮略詞根詞素以及特殊縮略形拘束詞根詞素「-コン」的比較分析，了解到縮略形日語外來語詞素在形態及語意上與外來語縮略詞根詞素相異，而是與「-コン」相近，於是將縮略形日語外來語詞素定位為依賴縮略前的原詞根詞素之縮略形拘束詞根詞素。

最後，也闡述了兩個縮略形日語外來語詞素所結合而成的縮略語複合詞其與英語混成語(blend)類似的日語詞彙造詞之性質。

關鍵詞：外來語詞素、複合縮略詞、縮略形、生產性、「唯一詞素」

* 台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

About the Word Formative Element of the Japanese Loanword Morpheme Abbreviations -Mainly Focus on Morpheme with Low Productivity-

Hui-jun Lin *

Abstract

The analysis subjects in this thesis are the Japanese loanword morpheme abbreviations with incomplete meaning and form, which also cannot be used separately, such as “BINI” from the word “BINAGASA” and “KOSU” and “PA” from the word “KOSUPA”, in order to conduct the word formation study.

First we focus on the Japanese loanword morpheme abbreviation itself to analyze from word formation aspect, such as the relation, form, and the combined words between the original word and its abbreviation. Then we found out that there are more than half the Japanese loanword morpheme abbreviations are “sole morphemes” with low productivity as a whole. Second, we clarify the reason why the Japanese loanword morpheme abbreviations become Japanese morpheme. In addition, by analyzing and comparing with loanword abbreviated base morpheme such as “ROKE” and “REJI”, and the special bound abbreviated base such as “-KON”, we can understand that the Japanese loanword morpheme abbreviations’ form and meaning are different from loanword abbreviated base, but similar to “-KON”. So we locate the Japanese loanword morpheme abbreviations as a bound abbreviated base which rely on the original base.

And last, we elaborate the similarity in Japanese word formation character between the compound abbreviations connected by two

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

Japanese loanword morpheme abbreviations and the English hybrid word(blend).

Keywords: loanword morpheme, compound abbreviation, abbreviation productivity, “sole morpheme”

臺灣大學學術期刊資料庫

造語成分的な省略形外来語形態素に関して
—生産性の低い要素を中心に—

林慧君*

要旨

本稿では「ビニ傘」の「ビニ」、「コスパ」の「コス」「パ」などのような、単独用法もなく、意味的にも形態的にも不完全な省略形外来語形態素を分析の対象として取り上げ、その語構成的な考察を行う。

まず、省略形外来語形態素自身を、省略前の元語基との関わりや形態、結合相手などの語構成的な側面から分析したところ、省略形外来語形態素は、大多数(9 割以上)は、その元語基の外来語が日本語に存在し、そして半分以上がいわゆる「唯一形態素」であり、全体的には生産性が低いことが確認できた。次に、意味も語形も不完全な省略形外来語形態素が日本語の形態素として機能し得る理由も解明できた。それから、「ロケ」や「レジ」といった外来語省略語基、また特殊な短縮形拘束語基「-コン」との比較を通して、省略形外来語形態素は、形態的・意味的には外来語省略語基とは異なる性格を有するが、「-コン」とは近似し、省略前の元語基へ依存する短縮形拘束語基だと位置づけた。

最後に、省略形外来語形態素どうしでの複合略語が英語の混成語(blend)と似ているという日本語の語彙としての造語性質も述べた。

キーワード：外来語形態素、複合略語、省略形、生産性、「唯一形態素」

* 台湾大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

造語成分的な省略形外来語形態素に関して
—生産性の低い要素を中心に—

林慧君

一、はじめに

現代の言語生活では伝達の利便性などから、ことばを略して使用する傾向が増えている。日本語の中にも、例えば「アルミ住宅」「コンビニ弁当」「ビニ傘」「コスパ」などのような複合語の中で、外来語の部分省略が見られる。が、考えてみると、これらの複合略語に用いられている省略形の外来語形態素は、前２例の「アルミ」と「コンビニ」は単独でも日本語として使え、表す意味内容も明確であるのに対して、後の２つの複合語の「ビニ」と「コス」「パ」は単独では使えず、その意味内容も一見しては不明なものである点で違いがある。また、「アルミ」と「コンビニ」はかなりの造語力をもっていて、様々な要素と結合できる[1]のに対し、「ビニ」と「コス」「パ」は造語力をあまりもたず、他の要素と結合できない、といった相違も見られる。

なお、これらの複合略語の語形成も異なっているように思われる。前の２語は、先に〈省略〉という造語手段によって「アルミ」(←「アルミニウム」)と「コンビニ」(←「コンビニエンスストア」)ができた後、他の要素と〈複合〉したものである。一方、後の２語は、先に〈複合〉という造語手段によってできた複合語(「ビニール傘」「コストパフォーマンス」)から〈短縮〉したものである。[2]

上に見た如く、一見して同じような外来語の複合略語ではあるものの、その語形成過程が異なるし、用いられた省略形の外来語形態

[1] 例えば、「アルミ合金」「アルミボンネット」、「コンビニ強盗」「コンビニコミック」などが挙げられる。単独用法もあり、造語力をもつ外来語省略語基に関しては、林(2016)を参照されたい。

[2] 外来語複合語の略語における語形成過程の異なりに関しては林(2004)を参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

素も語構成的性質が違うように思われる。

本稿では、後者の「ビニ」「コス」「パ」などのような、単独用法もなく、意味的にも不完全で、生産性をあまりもたない省略形の外来語形態素を対象に、その語構成的性質や日本語の形態素としての働きなどを考察したい。

二、先行研究について

本研究と関連のある先行研究としては、主に省略形の外来語形態素に関する論考、小池(2005)、柴垣(2009)と林(2004、2016、2017)が挙げられる。

小池(2005)では省略語と本来の完全語形の語との関係を中心に、両者における意味用法や運用的意味の相違などの考察が行われた。当論文では短縮の語例は挙げられてはいるものの、全体としては略語自身に対する論述なので、省略形の外来語形態素の語構成的な本質に関しては詳しく論じられていない。

柴垣(2009)は外来語を含む複合語短縮形の語例について、語構成、拍数、短縮パターンなどからその語構成的特徴を検討したものである。この論文では複合語短縮形の省略語基化の定着が省略語基に造語機能を持たせることにつながる、ということは確認されたが、外来語の省略語基が如何に日本語の形態素として振る舞うのかに関しては詳細な記述が欠けているように思われる。

林(2004、2016、2017)は外来語の略語に関する一連の考察である。林(2004)は語形成過程の異なる二種の外来語複合語の略語について論述したものである。林(2016)は「ロケ」「レジ」などのような、先に〈省略〉してから〈複合〉のはたらきを果す、単独用法をもち生産性をも有する、いわゆる外来語の省略語基を分析したものである。林(2017)はやや特殊な外来語省略語基「-コン」に絞って論述したものである。多くの元語基から形態素が崩された同音異義語の性質をもつ「-コン」には、その語基としての性質の度合いによって、かなりの造語力をもつ「ロケ」「レジ」といった省略語基に近似している

臺灣大學學術期刊資料庫

もの(語基性強)から、それほど造語力をもたないもの(語基性弱)、更にその中間的なものもあることを見た。多様かつ複雑な語構成的特徴があることを示し、短縮形拘束語基という形態素としての「-コン」の位置付けを試みた。

先行研究の概観から、外来語の省略形態素に関する従来の考察が主に造語力のあるものを対象としてきたことがわかる。本稿では、それらとは違って、「ビニ傘」「コスパ」に用いられた「ビニ」「コス」「パ」などのような、単独用法もなく、あまり生産性をもたない省略形の外来語形態素に注目する。これらは語の構成要素としてそれほど生産性はないものの、日本語の形態素の一員であるには変わりなく、外来語の形態素を論じる際に看過できない特徴をもっていると思われる。従い、本稿ではこれらを研究対象に取り上げ、その語構成的性質などについて論述する。そして、前述した「ロケ」「レジ」といった造語力をもつ外来語省略語基、また特殊な外来語形態素「-コン」との比較を通して、日本語の形態素としての位置づけも試みたい。

三、考察対象と考察法

既に前述したが、「ビニ」「コス」「パ」などのような省略形の外来語形態素は、単独では明確な意味をもたず、文において単独用法もなく、常に他の要素と結合する。即ち、拘束形式の要素なのである。この点では、宮島(1972=1994)の言う「無意味形態素」(ex.「ビー玉」の「ビー」、「昆虫」の「昆」)と似ていると思われる。無意味形態素とは、形態素自身では積極的な意味をもっておらず、つねにほかの特定の(有意味的な)要素と結びついてあらわれる要素のことである[3]。

なお、省略形外来語形態素の造語力に関して、冒頭ではあまり生産性がないと述べたが、詳しくは第四節(二)で検証することにして、

[3] 宮島((1972=1994:122)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

今しばらくは、造語成分的[4]な省略形外来語形態素(以下略して「省略形外来語形態素」)と称することにする。

ところで、分析の対象とする省略形外来語形態素であるが、辞書に見出し語として載っている場合は、何らかの意味を明確に表しているとみて原則的には除外する。但し、その省略語形が辞書に登録されているとしても、実際にネットなどを通して単独用法の有無を確認し、単独用法が特に見当たらない場合は、考察の対象とする。例えば、「エネ」「ゲバ」などである。[5]

なお、例えば、

「アメ」:「アメフト」(アメリカン)、「アメ車」(アメリカ)

「セク」:「セクハラ」(セクシュアル)、

「セクキャバ」「セクパブ」(セクシー)

のように、省略前の元語基の形態・品詞などが少々異なっていても、その語源が同じものであり、意味も関連性が高いと思われる場合は、同一形態素とする。

今回は、まず前考[6]で扱った外来語の複合略語を再び考察の対象とするが、さらに雑誌[7]からも外来語の複合略語をピックアップし追加する。そして、前述した定義に基づき、その外来語の複合略語に用いられた省略形外来語形態素が、単独で明確な意味をもたず、単独用法もなく、常に他の要素と結合する拘束形式要素かどうかを一々検証して分析対象と選定する。結果として、省略形外来語形態素を

---

4 山下(1995:62、63)に、造語成分の本質や性格などについて詳しい論述が見られる。意味の側面から見れば、造語成分は、明確な概念を有する者が大部分をしめるものの、明確な語彙的意味をもつ形態素とは言えないものも含まれている。つまり、造語成分とは、語基から接辞へと連続的に位置する語構成要素ということになる、と言う。これに従うと、本稿で扱う「ビニ傘」の「ビニ」といった、単独では明確な語彙的意味をもたない省略形の外来語形態素も「造語成分」と見ていいと思われるが、今しばらく、本稿では「造語成分的」という用語を用いることにする。

5 第二節で触れたように、特殊な外来語形態素「-コン」には、生産性の高いものから中間的なもの、そして低いものまでがあるが、今回扱う省略形外来語形態素は造語力があまり発達していないものに限定する故、「-コン」は考察対象から外す。

6 林(2004)。

7 『AERA』2016 年 No.1～No.10。

臺灣大學學術期刊資料庫

94 個拾うことができた。その省略形外来語形態素による複合略語は異なり語数で 139 語収集できた。

以下、省略形外来語形態素に関して、その形態、結合相手などを、また複合略語に関しては語構成や省略前の語形との関わりなどを考察する。

最後に、造語力をもつ外来語省略語基及び特殊な外来語形態素「-コン」との比較を通して、造語成分的な省略形外来語形態素の語構成的性質や形態素としての位置づけなどを試みる。

四、語構成的考察

（一）省略形形態素自体について

今回選定した 94 個の造語成分的な省略形外来語形態素については、元語基との関わり、形態などの語構成的性質を考察する。

まず、省略形外来語形態素とその省略前の元語基との関わりを調べてみる。94 個のうち 89 個(約 95%)は、省略される前の元語基がそもそも存在しており、省略形外来語形態素の大多数を占めている。例えば「アカハラ」の「アカ-」は「アカデミック」という元語基からの略語形、「ゲーセン」の「ゲー-」「-セン」もその元語基がそれぞれ「ゲーム」「センター」といった現代語で存在している外来語である。一方、略される前の元語基が古い言葉だったり、現在は用いられていなかったりする外来語で、成分の再構によってはじめてその元語基が探し求められるものがある。これらの例としては、「ゲルピン」の「ゲル」(←「ゲルト」)、「半ドン」の「ドン」(←「ドンタク」)、「ビー玉」の「ビー」(←「ビードロ」)、「ベリカード」の「ベリ」(←「verification」)、「エバミルク」の「エバ」(←「evaporated」)と 5 例しかなく、ほんの僅かである。「ゲル」「ドン」「ビー」の元語基は古い言葉で、現代の言葉においては他の要素と結合したことにより、初めてその元語基の言葉の存在がわかる。「ベリ」と「エバ」は、他の要素との結合によって初めてその外国語の元語基の存在が気付かれる省略成分なのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

斎藤(2013)では、外来語の省略語基の中には、省略されることによって宮島(1972=1994)のいわゆる「無意味形態素」の存在になっているものが多いのではないか、と推察された[8]が、上に見たように、省略形外来語形態素の場合は、省略によってその元語基の存在が初めてわかるものは意外と少ないことがわかった。つまり、外来語省略形態素の大多数はその元語基の外来語が単独用法としても存在しているのである。

次に、省略形外来語形態素の略し方と拍数を調べることにする。元語基の後部分が略される後略パターンは、94 個のうち 89 個あり、約 95%も占めている。拍数では、2 拍が一位で 84 個(89%)もあって圧倒的に多い。つまり、省略形外来語形態素は、元語基から後略した 2 拍という形態的な特徴をもつ。例えば、「カジ」(←「カジュアル」)「キャバ」(←「キャバレー」)「デパ」(←「デパート」)「ドラ」(←「ドラマ」)「パワ」(←パワー)「ヘル」(←「ヘルメット」)などである。

ところが、 元語基から後略した 2 拍という形態的な特徴の結果、次の例から見るように、同音異義の場合が生じやすくなる。例えば、

ex. 「レス」:「ファミレス」(←「レストラン」)、
「プロレス」「アマレス」(←「レスリング」)
「フレ」:「フレカジ」(←「フレンチ」)、
「セフレ」(←「フレンド」)
「ピン」:「ピンぼけ」(←「ピント」)、
「ピンサロ」(←「ピンク」)、
「ゲルピン」(←「ピンチ」)

同音異義の省略形外来語形態素の一番典型的なのは、「-コン」と言えよう。林(2017)では、「-コン」の元語基が「コンクール」をはじめ、「コンディション」「コントロール」「コンプレックス」など 34 個もあることを見た。このように、同音異義の省略形外来語形態素は、単独ではその語彙的意味が明確ではなく、常に他の要素と結

[8] 斎藤(2013：31)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

合することによって、言い換えれば他の要素に依存して初めてその意味内容が捉えられるわけであろう。

なお、今回調査した省略形外来語形態素の中には、同じ語基から異なる二つの形で略された形態素の例も見られた。「パーティー」から略されるが、複合語の前項に位置する場合は 2 音節の「パー-」、後項に位置する場合は 1 音節の「-パ」になるケースがその例である。例えば、「パー券」「タコパ」「ダンパ」に見ることができる。また、「ユートピア」から略した形態素も「-ピア」と「-トピア」という二つの形があり、例えば、「シルバーピア」「グリーンピア」「コンピュートピア」「シートピア」「テレトピア」などに見られる。これらの二つの形は漢語形態素の「雨降り」と「雨傘」に見られる「あめ」と「あま」のような関係、つまり「異形態」とでも考えてよさそうであろう。

(二) 結合相手

この節では、結合相手の側面から省略形外来語形態素の語構成的な分析を行う。今回の分析対象となる 94 個の形態素についてその結合相手を調べると、全部で 181 個(異なり)ある。

前節では省略形外来語形態素は語形が短く 2 拍のものが圧倒的に多いと述べたが、その結合相手の語形の長さを調べたところ、同じく 2 拍が断トツトップで 160 個もあり、88%を占めている。要するに、2 拍の省略形外来語形態素と 2 拍の結合相手との［2 拍＋2 拍］結合パターンが最も多いのである[9]。例えば、「アカハラ」「連ドラ」「デパ地下」「ビニロン」「ミニパト」「サポセン」などが挙げられる。

ところで、冒頭では、省略形外来語形態素は造語力をもたず、あまり他の要素と結合できないと述べたが、ここでは、果たしてこれらの省略形の形態素に生産性がないかどうかを、その結合相手の数を調べることによって確かめる。結果として、まず、結合相手が唯一かどうかに分けて見てみると、表 1 のようになる。

[9] これは林(2004:63)で論じた、[2 拍＋2 拍]のパターンが外来語を含む複合語の典型的な短縮パターンだという記述と一致している。

臺灣大學學術期刊資料庫

表 1　結合相手の数の性質

結合相手が唯一かどうか	唯一	非唯一
省略形外来語形態素の数	50 (53%)	44 (47%)

更に、結合相手が非唯一の場合の内訳を表 2 に示す。

表 2　　結合相手が非唯一の場合の内訳[10]

非唯一の場合の造語数	2 例	3、4 例	5 例以上
省略形外来語形態素の数	23(24%)	16(17%)	5(5%)

表 1 及び表 2 から、今回扱った 94 個の省略形外来語形態素のうち、結合相手がたった一つのもの、更に、その唯一形態素と造語例が 2 例の形態素を合わせると、全体の 77%ぐらいで 8 割近いという結果を得た。要するに、これらの省略形外来語形態素はやはり全体的にあまり生産性を持たないと確認できた。

造語数が 3、4 例の省略形態素は「ドラ」(「朝ドラ」「昼ドラ」「連ドラ」)、「サラ」(「脱サラ」「安サラ」「サラ金」)、「デジ」(「デジコミ」「デジサポ」「デジコン」「デジスコ」)、「ビニ」(「ビニ傘」「ビニ本」「ビニタイル」「ビニロン」)などのように全部で 16 個(17%)ある。

一方、5 例以上の造語数をもつ、やや造語力を有する省略形外来語形態素もないわけではないが、次の 5 個(5%)だけである。

「アメ」:「アメカジ」「アメコミ」「アメ車」「アメフト」
　　「アメラグ」
「エネ」:「省エネ」「再エネ」「新エネ」
　　「エネ庁」「エネファーム」

[10] 表 2 の中の%は省略形外来語形態素全体 94 個に対する比率。

臺灣大學學術期刊資料庫

「ピア/トピア」:「シルバーピア」「グリーンピア」
「コンピュートピア」「シートピア」
「テレトピア」
「ノミックス」:「ソフトノミックス」「レーガノミクス」
「リコノミックス」「あべノミックス」
「ウーマノミックス」
「ハラ」:「セクハラ」「ロケハラ」「マタハラ」「スメハラ」
「アルハラ」「終わハラ」…

「アメ」、「エネ」と「ピア/トピア」「ノミックス」は上に挙げたように 5 例ずつの造語例がヒットできた。「ハラ」は今回の分析対象にした省略形外来語形態素の中で特殊なものであり、かなりの造語力をもち、「セクハラ」をはじめ、13 個もの造語例を収集できた[11]。これらは語基化しつつある省略形形態素とでも考えられよう。とは言うものの、これらは単独ではそれほど明確な意味をもたず、文における単独用法がなく、常に他の要素と結合するという語構成的性質を有する故、本稿の分析範囲内にしたわけである。

次は、形態と語種の観点から省略形外来語形態素の結合相手を分析する。

まず、結合相手が省略成分かどうかを調べたところ、94 個の省略形外来語形態素と結合した 181 例の結合相手のうち、省略成分は 122 例(67%)であるのに対し、非省略成分は 59 例(33%)という結果を得た。省略形外来語形態素はその結合相手も 6 割以上省略成分だとわかった。また、その結合相手の省略成分も半分以上(117 例(65%))が外来語でもあった。例えば、「ヤンエグ」「シスオペ」「ラジカセ」「サントラ」「ファミサポ」などである。つまり、省略形外来語形態素は同じ省略形外来語形態素と結合しやすいという傾向が見受けられたのである。

[11] 「-ハラ」の造語は、王(2017)にも取り上げられたが、二十数語の造語例もあるとする。本稿での数と異なっているが、それは調査したデータベースが相違することによると考えられる。いずれにせよ、「-ハラ」の造語力が無視できないのは事実であろう。

臺灣大學學術期刊資料庫

一方、非省略成分の場合、もっとも多いのは一字漢語であり、「ケント紙」「ソー活」「半ドン」「デング熱」などの 23 例がヒットされた。結合相手として、省略形外来語形態素に次ぐ二番目を一字漢語が占めているのである。また、和語と結合する例(「朝シャン」「赤ヘル」「安サラ」…)も、非省略形の外来語と結合する例(「エネファーム」「ワンオペ」「コンピアルバム」…)なども見られた。

次は、省略形外来語形態素の結合相手を、無意味かどうかの観点から考察する。

宮島(1972=1994:121)では「無意味形態素は常に他の特定の(有意味的な)要素と結びついてあらわれる」と記述されている[12]。これより考えると、本稿の考察対象とする省略形外来語形態素は単独では明確な意味をもたない要素であるので、その結合相手としては有意味な成分が期待される。結合相手の意味性の有無を調べてみたところ、94 個の省略形外来語形態素はその結合相手の種類と内訳が表 3 の通りとなった。

表 3　省略外来語形態素の結合相手

結合相手の種類(有意味か無意味か)	数
全て無意味的形態素	56(60%)
全て有意味的形態素	25(27%)
有意味と無意味の両方ともある	13(13%)

要するに、例えば、「リスコミ」「カメリハ」「ゲーセン」などの例の如く、単独では明確な意味をもたない省略形外来語形態素の 6 割が無意味的形態素ばかりの結合相手と結び付くということである。この結果は、上述した宮島(1972=1994:121)の「無意味形態素は常に他の特定の(有意味的な)要素と結びついてあらわれる」という記述

[12] ここで言う無意味というのはそれ自身では積極的な意味をもっていないことである。

臺灣大學學術期刊資料庫

と相違するもので、注目に値すると言えよう。

ここで、意味不明確な省略形外来語形態素が、なおまた無意味的な形態素と結合する場合、その複合略語の意味が如何にして捉えられているのかが問題になってくる。これに関しては後の第五節の(一)で考えてみることにする。

（三）複合略語について

本節では省略形外来語形態素を含む複合略語について分析を行う。今回の調査でその複合略語は異なり語数で 139 語収集できた。以下、語構成、略される前の語形との関わりなどの観点から複合略語について検討する。なお、省略形外来語形態素によって結合された複合略語のことを複合略語と略する。

上で、2 拍の省略形外来語形態素と 2 拍の結合相手が結び付いた［2 拍＋2 拍］の結合パターンが最も多く、一番安定した語形だと述べたが、139 個の複合略語のうち、[2 拍＋2 拍]という造語パターンの複合略語が 106 語(76％)も占めていることを確認できた。つまり、省略形外来語形態素による造語のパターンはかなり限定されていると言えよう。

なお、複合略語の略される前の元複合語と思われる語が、外国語からの訳語なのか和製語なのかを調べてみると、和製語(ex.「モラルハラスメント」→「モラハラ」など)が 124 例　(89％)あるのに対し、訳語(「セクシュアルハラスメント」→「セクハラ」)は 15 語(11％)に過ぎないことがわかった。即ち、省略形外来語形態素は、外国語訳語より和製の複合外来語の省略形に多く見られると言えよう。

次に、複合略語の語構成について論じる。

省略形外来語形態素を含む複合略語の語構成パターンは主に、

①前・後項要素 a・b が結合した[ab]複合語からの短縮語

②前・後項の(省略)形態素が結合した [a(略)＋b(略)] 略語

③他の語をもじった略語

と主に三種類にまとめられる。

① の例としては、「ロケハラ」と「連ドラ」などが挙げられる。「ロ

臺灣大學學術期刊資料庫

ケハラ」は、前・後項要素「ロケーション」と「ハラスメント」が結合した「ロケーションハラスメント」という複合語から短縮されたものであり、「連ドラ」も「連続ドラマ」から短縮されたものである。

一方、②というのは、一つもしくは二つとも省略形である成分二つが結合して出来た複合略語である。例えば、「朝シャン」というのは前項要素の「朝」に、「シャンプ」から略した「シャン」という省略形態素が結合した例であり、「アメコミ」という語は、「アメリカン」から略された成分「アメ」が、「コミックス」から略された「コミ」と結合した複合略語である。[13]

他に、③の他の語をもじった略語は、今回の調査では「口コミ」「億ション」「ジャパゆきさん」の 3 例のみヒットした。「口コミ」というのは「マスコミ」という複合略語をもじった略語で、「億ション」は「マンション」をもじったもので、「ジャパゆきさん」というのは「からゆきさん」をもじったことばなのである。

以上の三つのパターンの数を数えてみると、①の[ab]複合語からの短縮パターンは 84 例(60%)あり、半数以上を占めるのに対し、②の [a(略)＋b(略)] 略語は 51 例(37%)という結果を得た。要するに、省略形外来語形態素を含む複合略語の語構成は、主に[ab]複合語からの短縮と、前・後項の(省略)形態素が結合した[a(略)＋b(略)] 略語の二種類であり、前者の[ab]複合語からの短縮が半分以上を占めている、と言える。[14]

次に、略される前の語形との関わりから複合略語を検討するが、複合略語に略される前の元複合語が実際に日本語として用いられて

[13] 複合略語の語構成パターンは①か②かは、原則としては辞書の説明により判断する。例えば、「アメコミ」という略語は辞書(goo 辞書)によると、“《(和)American＋comics から》”と説明されている故、「アメコミ」というのは「アメリカン」からの略した「アメ」と、「コミックス」から略した「コミ」が結合した、②の複合略語と判断したわけである。一方、「ランオペ」というのは、辞書(goo 辞書)では“「ランドオペレーター」の略。”と説明されている故、①の複合略語とするのである。

[14] 他に、他の語をもじった「口コミ」「億ション」「ジャパゆきさん」と三つの略語と、「ゲーマー」という派生語もある。

臺灣大學學術期刊資料庫

いるかどうかを検証する。例えば、「アル中」の場合は、それに略される前の元複合語「アルコール中毒」という語形も用いられる。一方、「安サラ」の場合は、和語形態素の「安」と「サラリー」から略した「サラ」が結合した略語であり、その省略前の語形としては「安サラリー」が考えられるが、実際に「安サラリー」という複合語は日本語としては使用されていない。つまり、略語の元複合語が存在していないということである。

本稿では略語の元複合語の語形が日本語として存在して用いられているかどうかを、辞書で検証する。今回は『カタカナ新語辞典(改訂第 4 版)』、『現代用語のカタカナ語辞典〈電子版〉Logo Vista goo 辞書』、『goo 辞書』(ネット辞書)と三冊を使う。そのうち、二冊以上登録されている場合だと、その語形が存在して用いられていると認めるが、三冊ともに、または一冊にしか登録されていない場合は、その語形は存在せず、用いられていないと見做す。

上述した検証方法で調べたところ、略語の元複合語の語形が日本語として存在して用いられるのは 45 例(32%)あるのに対し、日本語として存在せず、用いられないのは 94 例(68%)もある、との結果であった。基本的には、② [a(略)＋b(略)]の語構成による略語は殆どその元複合語が存在せず、用いられていないのだが、①の[ab]複合語からの短縮の略語はその元複合語が日本語として用いられたり、用いられなかったりする。

複合略語の元複合語が存在する場合は、その元複合語から略され複合略語が造られたことによって省略形外来語形態素ができたと見ることができるが、元複合語が存在しない場合は、その省略形外来語形態素が如何にして略語の造語要素と成り得たのだろうか。次節で詳しく考えてみよう。

五、形態素としての分析

本節では、省略形外来語形態素の日本語の形態素としての存在理由や位置付けなどに関して、前節で論じた語構成的特徴、また他の

臺灣大學學術期刊資料庫

外来語の省略語基との比較から考えてみる。最後に省略形外来語形態素を含む複合略語の日本語の語彙としての造語的性質も論じる。

（一）語構成的特徴から

まず、前節で見た語構成的特徴に基づき、省略形外来語形態素は日本語の形態素としての存在理由を分析してみる。

第四節の(二)で、省略形外来語形態素の結合相手について形態と意味の側面から分析した。結合相手の形態は省略成分が 67%を占め、結果的に[省略成分＋省略成分]という構成の複合略語が 6 割以上も占めていることを見た。また、意味の側面から見ると、結合相手の 6 割ぐらいが省略形外来語形素と同じく無意味的形態素であり、[無意味的形態素＋無意味的形態素]の組み合わせが全複合略語の半分以上を占めている。要するに、省略形外来語形態素を含む複合略語の語構成として、[省略成分＋省略成分]という形態的な特徴、それに[無意味的形態素＋無意味的形態素]という意味側面の特徴をもつ組み合わせが半分以上を占めている、と明らかになった。

意味が不明確で語形も不完全な面をもつ要素どうしで複合略語を構成することは如何にして可能であろうか。それは、省略前の元複合語と関わりがあると思われる。

省略前の元複合語が(日本語の)語形として存在すると、その元複合語に還元さえすれば、略語の意味が取れるのである。つまり、省略前の完全な語形をもつ複合語が存在する限り、複合略語の意味が明確に捉えられるので、たとえ単独では意味も不明確で、かつ語形も不完全な外来語省略成分であっても、日本語の形態素としてはたらくことができると考えられる。例えば「アメ・フト」は、前・後項要素ともに、単独では語形も不完全で意味も不明確な省略形態素であるものの、「アメリカンフットボール」に還元すれば、その省略形態素の表す意味内容が取れるようになるのである。換言すれば、結合相手がないと、省略前の元複合語には還元できず、省略成分は単独では日本語の形態素としてはたらけないのである。これより考

臺灣大學學術期刊資料庫

えると、省略前の元複合語への還元というのは、省略形態素がその結合相手に依存するということを物語っているように思われる。

上述した如く、省略形外来語形態素は意味的にも不明確であり、語形的にも不完全な故、一まとまりの完全なる語の意味内容を表すためにはその結合相手への依存が必要になる。しかし、結合相手への依存というのは、言わば、結合相手が限定されてしまうとでも考えられる。そうなると、却ってその省略形外来語形態素の生産性を妨害してしまうことでも生じるようになると考えられる。それが故に、省略形外来語形態素はあまり造語力をもたないわけであろう。

一方、元複合語が存在するのと違って、元複合語が存在しない複合略語も多数(7 割近く)ある。これらの複合略語に用いられた省略形外来語形態素の場合は、どのようにして形態素としてはたらくことができるのだろうか。それは、省略形外来語形態素自身の性質、またはその結合相手の助けによると考えられる。

まず、省略形外来語形態素自身の性質の場合を見よう。

第四節の(二)で、5 例以上の造語数をもつやや造語力のある省略形外来語形態素として「アメ」、「エネ」と「ピア/トピア」「ノミックス」「ハラ」と五つの例があることを見て、特に「ハラ」は語基化が進んでいることを確認した。即ち、これらの省略形外来語形態素は、語基化の傾向があるため、造語力をもつようになる。故に、語形が不完全で意味も不明確であっても、語基化の傾向がある省略形態素は造語の形態素としてはたらけるようになるわけであろう。

次に、単独では語形も不完全で意味も不明確な省略形外来語形態素が結合相手の助けにより日本語の形態素としてはたらけるようになる場合を見よう。

例えば、「エバミルク」では前項の「エバ」は語形が不完全で意味も不明確な外来語省略成分であるが、その結合相手の後項要素「ミルク」はそれ自身でも積極的な意味を有する、いわゆる有意味的外来語形態素である。従い、前項の「エバ」は、たとえ語形も意味も不完全であっても、「ミルク」のような後項要素との結合(助け)によ

臺灣大學學術期刊資料庫

って造語の形態素としてはたらくことができるようになると思われよう。また、「ビニタイル」も、その語形も意味も不完全な省略形外来語形態素「ビニ」が有意味的外来語形態素「タイル」との結合(助け)による例である。なお、「パチプロ」も、後項要素の、単独用法もある有意味的形態素の外来語省略語基「プロ」との結合(助け)により、形も意味も不完全の前項要素「パチ」が造語の形態素としてはたらけるようになる。

他に、結合相手が有意味的形態素でさえあれば、語形も意味も不完全な省略形外来語形態素は、その有意味的非外来語形態素の結合相手の助けによって、形態素としてのはたらきを果たせることもある。例えば、結合相手が漢語・和語の場合、「デパ下」「デパ屋」「前ピン」「後ピン」などのように、漢語か和語の結合相手が明確な意味を有するので、その助けによって、「デパ」「ピン」などの省略形外来語形態素が日本語の形態素としてはたらけるようになる。他に同じような例として「昼ドラ」「半ドン」「ビー玉」「デング熱」「カルメ焼き」なども挙げられる。

なお、結合相手が意味の明確な外来語接頭辞も、単独では語形も意味も不完全な省略形外来語形態素に形態素としてのはたらきを与えることができる。例えば「インパラ」「ノンパラ」などである。

要するに、上述した例からして、単独では語形も意味も不完全な省略形外来語形態素は、その結合相手が有意味的形態素でさえあれば、その結合相手の助けにより日本語の形態素としてはたらくことができるようになる、と考えられる。

以上語構成的特徴の観点から、省略形外来語形態素が、単独では語形も不完全で意味も不明確であるのに、形態素としてはたらくことができるようになる理由について見てきた。複合略語の元複合語が日本語として存在する場合は、その複合略語の元複合語に還元することができることにその理由があると考えられた。一方、複合略語の元複合語が存在せず、還元できない場合は、省略形外来語形態素自身が語基化する傾向があったり、その結合相手が有意味的形態

臺灣大學學術期刊資料庫

素であったりすることにその理由を求めることが出来たかと思われる。[15]

（二）他の要素と比較して

ここでは、単独用法をもち造語力を有する外来語省略語基(以下「外来語省略語基」と略す)、また特殊な外来語省略語基「-コン」の両者との比較を通して、省略形外来語形態素の形態素としての位置付けを論じる。

まず、語形成に関してだが、第二節でも述べたように、「ロケ」「レジ」などの外来語省略語基は先に〈省略〉してから〈複合〉のはたらきを果すものである。それに対し、「-コン」は、同音異義語の性質をもつ、多くの元語基から崩された形態素であるが、[ab]複合語から短縮した複合略語が約全体の 6 割で、複合する際に生じた省略形の場合が多い形態素なのである[16]。一方、省略形外来語形態素は、同音異義語の性質はもたないものの、[ab]複合語から短縮した複合略語が全体の約 6 割で[17]、「-コン」と同じく複合する際に生じる形態素が多いことが見受けられた。要するに、語形成の点においては、省略形外来語形態素は外来語省略語基とは相違するが、「-コン」には近似している、と言える。

次に、語構成的特徴から、外来語省略語基と「-コン」の二者と省略形外来語形態素を比較する。

まず、形態的に見た場合、外来語省略語基は単独用法を有するのに対し、「-コン」は単独用法をもたず、結合専用の形態素なのである。省略形外来語形態素も「-コン」と同じく単独用法をもたない結合専用であり、外来語省略語基とは異なる。

意味的には、外来語省略語基が単独でも明確な意味を有する形態素であるのに対して、「-コン」はそれだけでは積極的な意味をもた

[15] 他に、「キャバクラ」「ビデスコ」といった、前・後項要素がともに有意味的形態素どうしで結合した複合略語もあるが、これらは結合関係で言うと並列関係の複合語であり、しかも有意味的形態素どうしなので、形態素としてはたらくことは問題ないと思われる。

[16] 林(2017：137)を参照。

[17] 上記第四節(三)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

なく、他の要素と結合する際に生じた短縮形で意味付けがなされる形態素である。省略形外来語形態素も、「-コン」と同じく、それだけでは無意味的形態素であり、他の要素との結合の際に生じる短縮形で意味付けがなされるものである。この語構成上の意味的な特徴からも、省略形外来語形態素は外来語省略語基とは違って、「-コン」とは似ている。

結合相手から見れば、外来語省略語基は漢語語基と結合しやすく、特に 4 音節の外来語省略語基は漢語との結合が目立ち、例えば「コンビニ弁当」「分譲アパート」「リストラ削減」などを見ることが出来る[18]。それに対し、「-コン」の結合相手は外来語が 7 割以上を占めている。例えば「リモコン」「ボディコン」「レセコン」などである[19]。第四節(二)でも詳しく見たが、省略形外来語形態素は、省略形外来語形態素と結合する場合が一番多いが、更に、外来語語基もしくは外来語接頭辞との結合も入れると、外来語成分との結合が更に増える。というわけで、結合相手の観点から見ても省略形外来語形態素は「-コン」と似ており、外来語省略語基とは相違する。

最後に造語力から検討してみると、外来語省略語基は造語力をもち、多くの外来語略語を生産している形態素である。中には、例えば「プロ」「テレビ」「ビル」などのようにかなり高い造語力を有するものもあり、これらには 500 例以上の造語例も見られた[20]。一方、「-コン」の場合は、「コンサート」・「コンピューター」・「コンパ」から略された「-コン」のように生産性の高いものから、僅か 1～3 の造語例しかもたない低い生産性のものまで[21]がある。それに対して、第四節(二)で述べた通り、省略形外来語形態素は生産性が低く、いわゆる唯一形態素が半数以上、造語例 2 例のものを入れると 7 割以上(77%)を占める。この点からは、省略形外来語形態素の造語力

[18] 林(2016：89)を参照。
[19] 林(2017：140)を参照。
[20] 林(2016：88)を参照。
[21] 「-コン」の元語基は 7 割以上が僅か 1～3 例の造語に留まっている生産性の低いものだという。詳しくは林(2017：135～136)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

が「-コン」に近似しているように見える。ところが、省略形外来語形態素は、「コンサート」・「コンピューター」・「コンパ」から略された「-コン」のような非常に高い生産性を有する形態素はなく、造語力の一番高い「-ハラ」(←「ハラスメント」)でさえせいぜい十数語の造語例しか見当たらない。要するに、省略形外来語形態素は、造語力という面では「-コン」と異なる性格を示し、全体的には生産性が低いと言えよう。

以上、省略形外来語形態素を、外来語省略語基それに「-コン」と比較した。省略形外来語形態素は、語形成及び多くの語構成的特徴において、外来語省略語基とは違って、「-コン」に近似している、と見受けられた。この点からして、省略形外来語形態素は、省略前の有意味の元語基に依存する短縮形拘束語基だと考えられよう。ところが、造語力の面においては、省略形外来語形態素は、「-コン」とも異なり、全体的に造語力が低いことを確認することが出来た。換言すれば、高い生産性をもつ外来語省略語基、そして生産性が高いものから低いものまである同音異義語の性質をもつ「-コン」の後の一番下に、省略形外来語形態素が位置すると言えよう。

（三） 複合略語について

本節では省略形外来語形態素が作り上げた複合略語の、日本語の語彙としての造語性質を分析してみよう。

語構成パターンから考えてみると、第四節の(三)で、省略形外来語形態素を構成要素としてもつ複合略語では 2 拍の省略形外来語形態素と 2 拍の結合相手との［2 拍＋2 拍］結合パターンが最も多いことを見た。そのうち、特に省略形外来語形態素どうしの結合が最も多いことを確認したが、この省略形外来語形態素どうしの結合は、その造語的性質が英語の混成語(blend)と似ていると思われる。ただ、英語の混成の仕方は、例えば、「brunch」(←「breakfast」+「lunch」)のように前項要素の後部略と後項要素の前部略との結合が多く[22]、

[22] 他に「motel」「fungry」「friendemy」なども似ているような構造をもつ例として挙げられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

出来上がった複合語が一まとまりの単語に感じられるのに対して、日本語の省略形外来語形態素どうしの複合略語の混成の仕方は、前・後項要素ともに後部略が多いため、一まとまりの単語というより、略語という印象が強く感じられるのである。

省略形外来語形態素は形態的には殆ど後略のタイプだと第四節(一)で述べたが、実は前部略の省略形外来語形態素がないわけでもない。「-ノミックス」「-ピア（or「トピア」)」「-コア」「-ション」「-ロン」などが見られた。この、前部分が略された省略形外来語形態素が複合語の後項に位置する場合、その複合略語([○○～＋～○○])は、一般的な[○○～＋○○～]の複合語に比べ、英語の混成語(blend)に近い感じがより強いと思われる。例えば、「ウーマノミックス」(←「ウーマン」＋「エコノミックス」)「コンピュートピア」(←「コンピューター」＋「ユートピア」)「メロコア」(←「メロディック・ハードコア」)「億ション」「ビニロン」(←「ビニール」＋「ナイロン」)などである。

ちなみに、第四節(二)で省略形外来語形態素の中には、語基化しつつあるもの(「ハラ」「アメ」「エネ」「ピア/トピア」「ノミックス」)も見られると論じた。特に「ハラ」の場合は、十数語以上の造語例がヒットできたが、なぜこれらには語基化の現象が生じられるのだろうか。それは、鈴木(1978)の言う二字漢語における「軸字」の概念からその答えを求めることが出来ようかと思われる。鈴木(1978)は、幕末明治期における新漢語の造語法として「軸字」「付加字」という概念を提出した。

> 二字漢語についても、一定の位置に構成素として一定の漢字を含む漢語のグループ(類)において、その類の中心となっている漢字を軸字と呼び、それと結合する漢字を付加字と呼ぶ…。[23]

例えば、「勧告」「抗告」「申告」「稟告」「広告」[24]などの「-告」という構成の新漢語を挙げ、そこから「告」という軸字を取り出して

[23] 鈴木(1978：145～146)を参照。
[24] 鈴木(1980：53)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

いるのである。つまり、軸字とは「同じような構成を有する漢語のグループの、軸となる漢字を指す概念」である。

省略形外来語形態素の「ハラ」も、そのような漢字成分の軸字と似ていると考えられる。「セクハラ」という訳語略語の使用普及により、一定して複合略語の後項要素の位置に立つ、軸字のような中心要素となったのであろう。もとは省略形外来語形態素どうしの軸字だったものが、[2 拍＋2 拍]という同じ「～ハラ」の構成パターンをもつ和製の複合略語(「アカハラ」「ドクハラ」「スメハラ」「モラハラ」「パワハラ」「終わハラ」など)にまで拡張し、その造語役割を益してきていると見受けられる。[25]

六、おわりに

以上、本稿では、「ビニ傘」の「ビニ」、「コスパ」の「コス」「パ」などのような、単独用法もなく、意味的にも形態的にも不完全な省略形外来語形態素を分析の対象として取り上げ、まず、形態素自体を、省略前の元語基との関わり、形態などの面から、その語構成的な考察を行った。結果として、省略形外来語形態素は大多数(9 割以上)は、その元語基の外来語が日本語のなかに存在していることがわかった。形態的には、元語基から後略した 2 拍のものが圧倒的に多いことを確認した。また、結合相手の観点から、省略形外来語形態素はいわゆる「唯一形態素」のものが半分以上を占めていること、全体的には生産性が低いことを論じ、さらには、その結合相手も半分以上それ自身では積極的な意味を持たない、無意味的形態素であることも明らかにした。

意味も語形も不完全な要素どうしの結合において、省略形外来語形態素が日本語の形態素として機能し得る理由も論述した。それは、

[25] 特に 2 音節の省略形外来語形態素がその漢語音節数に似ている故なのか、軸字のような構成パターンが発達しやすいと推測される。例えば、「ーコン」もそうであり、本稿の調査でも「アメ～」による「アメコミ、アメカジ、アメ車、アメフト 、アメラグ」、また「-コミ」による「マスコミ、リスコミ、口コミ、ミニコミ」の造語なども見られた。

臺灣大學學術期刊資料庫

まず、多くの複合略語(6 割)の場合、省略前の元複合語が日本語として存在し、その元複合語に還元することができるからだと考えた。一方、元複合語への還元ができない場合は、その省略形外来語形態素の語基化の傾向、または漢語形態素などの有意味的形態素である結合相手の助けなどにその理由を求めることができた。このことから、省略形外来語形態素は語の意味内容を表すのにその結合相手への依存度が高く、結合相手を限定してしまい、その結果それ自身の生産性の拡大を妨げてしまうと推論した。

なお、「ロケ」や「レジ」といった外来語省略語基、また特殊な短縮形拘束語基「-コン」との比較を通して、省略形外来語形態素が、形態的・意味的には外来語省略語基とは異なる性格を有し、「-コン」とは近似していることから、省略前の元語基へ依存する短縮形拘束語基だと位置づけた。なお、造語力の面では「-コン」とも異なり、生産性が三者のうち最も低いことも明らかにできた。

最後に、省略形外来語形態素どうしでの複合略語が英語の混成語(blend)と似ているという日本語の語彙としての造語性質も分析した。特に、「ウーマノミックス」「コンピュートピア」「ビニロン」などのような、前部略の省略形外来語形態素が複合語の後項に位置する場合は、その混成語的造語性質がより顕著であることも見た。

【参考文献】

王 敏東(2017)「語彙的に見る『セクハラ』」『台灣日本語文學報』第 42 期(台灣日本語文學會)

小池清治(2005)「〈手タレ〉〈脚タレ〉とは何のことか？」『シリーズ〈日本語探求法〉4　語彙探求法』(朝倉書店)

斎藤倫明(2013)「第 2 話　語種と語形成」『レキシコンフォーラム No.6』(ひつじ書房)

柴垣知香(2009)「外来語を含む複合語短縮形の通時的変化」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』第 5 号

臺灣大學學術期刊資料庫

鈴木英夫(1978)「幕末明治期における新漢語の造語法　―『経国美談』を中心として―」『国語と国文学』55-5(東京大学国語国文学会)

_____ (1980)「新漢語の造出と享受　―明治前期の新聞を資料として―」『国語と国文学』57-4(東京大学国語国文学会)

宮島達夫(1972=1994)「第 3 章 無意味形態素」『語彙論研究』(むぎ書房)

山下喜代(1995)「形態素と造語成分」『日本語学』14-5(明治書院)

林　慧君(2004)「外来語の複合語における略語の語構成」『語文研究』第 97 号(九州大学国文学会)

_____(2016)「外来語省略語基の語構成的特徴」『日本語日本文學』第四十五輯(輔仁大學外語學院日本語文學系)

_____(2017)「日本語の外来語形態素『 - コン』について」『台大日語文研究』第 33 期(台灣大學日本語文學系)

辞書

『用例でわかる　カタカナ新語辞典(改訂第 4 版)』(2016)
学研辞典編集部編　株式会社　学研プラス

『現代用語の基礎知識　カタカナ外来語訳語辞典』〈電子版〉
自由国民社

『goo 辞書』(ネット版)

臺灣大學學術期刊資料庫